

冷たく光る刀に映る学問——AI ブーム下の日本教育の鏡

中国伝媒大学

コンピュータ・サイバースペース・セキュリティ学部

サイバースペース・セキュリティ 1年

楊采晰

デジタル化の風が海から吹き、千年変わらぬ本の香りが新たな息吹とともに中国と日本の文教の地に溶け込んでいます。両国の教育情報化の比較は、異なる状況にある2人の賢者が互いの道で修行に専念しているようなものです。『教育信息化：中国与日本的比較』^[1]という本を開いたとき、まるで空を越えて議論に歩み入ったかのような感じでした。教育技術の波の中で教育の本質をどのように維持すべきか、賢者が不安を感じ、応えているのです。

広々としている中華、その勢いは万里の山や川を飲み込むことができます。

中国の教育情報化は次から次へと湧き起こって、国家政策に導かれ、広範囲に実施されています。辺鄙な山村では、ビッグデータプラットフォームとインテリジェントツールを活用して、生徒の適性に応じた教育を行っており、AI リレーが教育リソースの共有とパーソナライズ学習の普及を実現しました。無数のプラットフォームで、学問は尽きることなく、AI クラウドスクールの恩恵を享受できた学生として、情報教育の発展には特に注目せざるを得ません。中国の教育 AI 化は李白の詩「長風浪を破るに会^{かなら}ず時有り、直ちに雲帆を掛けて滄海を済^{わた}らん」のようです。教育の公平性の実践であろうと、技術革新の追求であろうと、中国の教育 AI 化はスケール之美を示すだけでなく、未来への大胆なビジョンも含んでいます。しかし、疾風の中で多くの枝が絡み合っており、現在の中国の教育情報化の調整はまだ包括的ではなく、何らかの欠落が生じるのは避けられません。長江に水量を調整するダムがなければ、たとえ流れ続けたとしても、四方八方に水を供給することは困難です。

扶桑の学府にはせせらぎが流れています。

日本の教育の情報化は遅いものの、国際基準に沿っており、安定的かつ標準化されています。日本の教育における AI の発展は、1990 年に打ち出された「情報教育計画」にまで遡ることができます。2000 年代以降、IT が普及し、文科省もその流れに追随して小学、中学、高校、大学レベルでの IT 主導の教育システムを強化しています。そして 2020 年の「GIGA スクール構想」は、教育への AI の本格導入への道を開き、日本の「AI 戦略 2021」ではプログラミング教育を社会教育に組み込むことになっています。教育の情報化により、日本人は幼い頃から様々な社会問題と科学技術や数学の関係を探求できるようになり、基本的な数学とデータサイエンスを活用して問題を解決する能力を持つようになります。

周到に準備し、厳格に長い間持続。富士山の雪のように、静かですが、季節の移り変わりとともに山や川は壮麗さに満ちています。現在、日本は内閣府の「Society 5.0」戦略に基づいて、教育テクノロジーの探求において一貫して慎重に取り組んでおり、その中でも、AI 分野への投資は特に高度です。たとえば、大学では教育フィードバックを改善するために AI を活用しており、シャープのロボット事業には教育への応用があります。また、デジタル教材の開発においては、厳格な技術基準と著作権基準により、教材の内容は高品質で長持ちし、教材の著作権は法に従って精密化しています。派手さを求めない、現実的で奥深いこのような知恵は、他国の教育情報化にとって貴重な参考になります。

氷のように透明で安全。AI は知的ですが、人間の倫理を完全に明確に理解しているわけではありません。この点で、日本の教育では倫理を基準とし、AI の利用に関して明確な一線を引いています。文部科学省は「AI 倫理ガイドライン」を打ち出し、AI が生徒児童の思想形成に干渉しないようにすることで、テクノロジーの影響の可能性を軽減しています。さらに目を引くのは、日本のいくつかの大学が「透明なアルゴリズム」を開発していることです。AI 教育フィードバックモデルを常に最適化することで、AI によって行われたすべての「決定」をそのソースまで遡ることができるようにするものです。様々な取り組みは、人々の期待に応え得るだけでなく、生徒の成長のために先導と伴走も行います。日本の AI 教育の安全戦

略は、あらゆるものに利益をもたらし、議論の余地なく成功を収める水のようなものです。「広島 AI プロセス」などの国際的な枠組みを通じて、日本は AI の倫理と標準の開発を主導しています。生成型 AI のリスクは依然として存在するものの、世界的に見ると、日本は AI 教育の分野で役割を務め通すイメージを確立しています。

互いの利益のために協力し、共に航海する戦略。

「科学だけが思想を解放し、教育だけが民族を活性化できる」という信念のもと、猛烈に前進する中国の教育情報化の急な物語は、強い決意を持って、壮大な効率とパワーを追求しています。しかし、そうすることによって教育の本質が次第に消え、機械的なアルゴリズムと数字の羅列に変わってしまうことはないのでしょうか。一方でテクノロジーと倫理の微妙なバランスを実現してきた日本では、たとえこれほど穏やかなペースであっても、発展の波の向こう側に横たわっているように見えるデジタルデバイドに直面して、彼らはどこへ向かうのでしょうか。

中国と日本は教育の伝統が異なりますが、AI の波により、両国が互いに手を携えて航海する可能性があります。魯迅はかつて「中国の若者が冷たさを捨てて、ただ前進することを願う」と語りました。日本の教育者、福沢諭吉も「学ぶことは他人に従うのではなく、自ら未来を探求することである」と述べています。この2つの格言が、AI 教育協力の真髄です。中国と日本のそれぞれが優れている分野は、お互いの欠点を補うことができます。

中国は AI 教育の大規模な実践において豊富な経験を蓄積しており、日本に応用の急速な拡大に向けた戦略と事例を提供できます。日本の AI 技術の高度かつ人間味のある活用は、中国に新たな啓発を与え、効率性を重視しながら、生徒の個々の発達にも配慮できるようにしてくれます。

さらに、AI 教育の Win-Win の状況は、科学研究開発と教育理念の交流にも反映されます。中国と日本は AI 教育技術を共同で開発し、人間と機械のコラボレーションの最適なモデルを共に模索することができます。国際教育協力を通じて、グローバルな視野を持った革新的な人材を育成することも可

能です。

中国と日本の教育の情報化は、冷たく光る利剣の最初のテストのようなもので、剣は厳かですが、大きな徳を秘めています。それは2つの哲学的概念の衝突のようなものです。テクノロジーのトレンドを追い続ける途中で、日本の受け入れの遅さからも学び、深く悟って、教育を通じて、知的で人間味を失わない優しい未来を創ることを目指すべきです。AI と教育が交差する中で、私たち一人ひとりが冷静さを失わずにペースを速めることによってのみ、広大な学びの海の中で知恵の光を見つけることができます。

^[1] 李哲、教育信息化：中国与日本的比較[M]、北京、社会科学文献出版社.2021